

新聞實讀

2005年(平成17年)7月25日 曜日

編集手帳

マグカップ一杯分の故人の遺骨を高温高压の条件で加工し、メモリアル・ダイヤモンドとして再生させる。そんなサーピ

スが話題を呼んでいる。アメリカとスイスの企業2社が手がけ、日本を含め、世界各地から注文があるという◆欧米では通常、遺体は土葬されてきたが、最近では土地が手狭なイギリスやアジア系移民の多いアメリカ西海岸で、火葬や火葬後の遺灰を自然に返す散骨も珍しくない。この種のビジネスの背景ともなっている◆日本では、お骨の粉を含んだ金属製のペンダントやプレート、遺灰を入れる小さな地蔵形の焼き物など、供養のための新商品も次々と登場している◆「大切な家族の遺骨の一部を身近な場所に置いておきたい」「お墓は高くつくので購入したくない」「洋風マンションに仏壇はそぐわない」。メモリアル商品に寄せられる買手の思いは様々のようだ◆散骨も増えている。法務省が、散骨は合法との見解を示した1991年以降、市民団体「葬送の自由をすすめる会」は約1000回にわたり散骨を実施してきた◆故人を自然に返す散骨は、仏教の輪廻(かむさむ)生の死生観に通じるものがある。永遠のメモリアル・ダイヤモンドはその対極というべきか。ともあれ、お墓に必ずしもとらわれない供養が洋の東西を問わず、広がつつあることは間違いない。